

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

私と子どもと〇〇の成長期

林 博樹

時計の針を少し巻き戻したいと思います。始まりは令和五年三月のことでした。命を受け、在原部長と菌田係長、私の三名で千葉市障害福祉サービス課に出向き、千葉市若葉区御殿町の地に「障害児入所施設」を整備する計画がありますと伝えたのが第一歩でした。

私は、平成三十年四月から「ふる里学舎あすみが丘（同市緑区）」の開所から、ずっと千葉市に身を置いていましたので、窓口として施設整備に関わるやり取りをスムーズに進める役割であったと思います。この時点で自分が施設長になるとは思いもしませんでした（イヤ、ちよつとは思ったかもしれません）。

当時、千葉市内に障害児の入所施設はありませんでした。これまで法人内では「ふる里学舎千倉」「ふる里学舎蔵波青年寮」「ふる里学舎船橋青年寮」を順次開設してきましたが、虐待や養育困難など複雑な家庭環境により、施設を必要とする実態を目のあたりにしてきました。児童相談所の一時保護所も定員超過が常態化し、地元から遠く離れた施設で暮らしている話も耳にしていました。このよ

うな現状を受け、里見理事長から千葉市に施設を建てようという思いが発せられました。

これまで私は、成人の入所施設や通所施設での支援に携わっており、児童支援についてはほとんど経験がないも同然です。子どもの支援は単に対象が成人から子どもに変わるだけではないと、これまでも法人の会議などをおしてその難しさを漠然と感じていました。

そんな不安と新規事業への期待が交錯する中、開設の準備委員会が立ち上がり、事業認可のための手続きや建築関係、大型備品の購入、地元町会への説明などなど多岐にわたる業務を役割分担しながら進めてきました。中でも、新たに施設を立ち上げる際、地域の理解を得るのがどれだけ大切なことか、これまでの「佑啓」にも触れられてきましたが、この度お世話になる、地元御殿町町の皆様に温かく迎えていただき、ご理解を得られたことは大きな心の支えとなりました。

並行して、子どもたちの受入れに向けた協議も本格化していきました。子どもたちが通う学校は千葉市にあります。特別支援学校

の小学部と中等部が分かれているので、全く違う場所に通うことになります。まず初めにスクールバスについての課題が挙がりまし。すでにスクールバスは台数、乗車児童数も一杯で、ルートの変更やバスの追加は教育委員会や特別支援学校でも、既存の生徒との公平性の担保の観点から、変更は難しいとの見解でした。しかしながら、中長期的な受入れ拡大を見据え、次年度以降のスクールバス増車や職員配置も含めた拡充について、繰り返し必要性をお伝えして、結果的にご理解をいただき前向きな検討へと話が進んでいきました。

また、実際に何人の児童が入学、転入するのは、行政、学校側にしてみれば、職員の確保やクラス編成などに直結するので、早々に人数を確定させたい思いがあります。一方で、利用調整をする児童相談所としては、県内全域から希望者を募ったり、調整会議等で時間を要します。双方の事情が分

かるが故に、間に立つ身としてもどかしさを感じる時期もありました。いよいよ、準備も本格化し、正式に法人内で選抜された異動メンバーによる準備委員会が組織されました。普段から関わりのある職員もいれば、今回初めて一緒に働く職員もいましたが、頼もしいメンバーを揃えていただきました。

その準備委員で理事長室に伺い、今後の動きについての打合せのなかで新施設の名前は「ふる里学舎千葉青年寮」と決定し、身が引き締まる思いがしました。

「さて、どんな子どもたちが入ってくるのだろう」そんな思いを巡らせる中、児童相談所から入所

候補となる子どもの情報が次々と提示され、それを受けて学校側と入学式や転校に向けた具体策の協議など準備も佳境に入ります。同時に、準備委員会のメンバーは、児童入所の先輩施設である「ふる里学舎千倉」「蔵波青年寮」「船橋青年寮」に住み込みこれまでのノウハウを直接学び、それを「千葉青年寮」にどうマッチさせていくかの打合せを重ねていきました。そして今年三月十四日、無事に建物の引渡しが完了。「すごい、広い、そしてきれい！」と、同時に、これから始まる新たな日々への期待感、そして、プレッシャー。様々な感情が交錯しました。



いよいよ四月一日の開所初日。

七名の利用者（小学部三年生から高等部二年生）を迎え、子どもたちの未来に向かって寄り添う新たな生活がスタートしました。また、新たに四名のフレッシュな新人職員も加わり、手探りながらも、はじめの一步を踏み出しました。

まずは、学校初日、子どもたちは緊張の表情を浮かべており、私

たち職員も「スクールバスの時間に間に合うか」「バスの中で大丈夫だろうか」と心配は尽きませんでした。そして、夕方に無事帰宅。ほっとした安堵の瞬間でした。そして翌日は、入学式。中等部一年と高等部一年に進学する子どもがいましたので、父親・母親のような思いを胸に、藤本係長とともに参加させていただきました。自分

の子ども以来の入学式に立ち会い、これからの成長を見守っていくんだなど実感しました。

学校生活も無事にスタートを切りましたが、学校から持ち帰る書類や手続きやら、明日の持ち物は？連絡帳は？水筒は？学年もそれぞれ異なるので、てんやわんやの毎日ですが、児童入所の経験職員がいてくれたことは本当に心強く、手際よく対応を進めてくれました。ふと、「自分の子どもが小

中学校に通っていた頃はどうかだったかな」と振り返ってみたものの、当時の様子があまり思い出せず、あまり記憶がない、いや、やっていなかった？子育ても疑わしい！しかし、子どもはすくすくと育っていききました。妻のおかげです。

子どもと関わるということ、幼児期から青年期までの子どもたちの発達段階を支える仕事は責任も重いですが、とてもやりがいのあることだと思えます。さらに複雑な家庭背景をもつ子どもたちとう向き合っていくのか、まだまだ至らないところも多いと感じます。ただ、子どもたちと共に一步を踏み出したばかりですが、とにかく一緒に遊んで、伸び伸びと育って欲しいと思います。

里見理事長からは「可愛がられる大人に育てなさい」「『あり

がとう」と、人に感謝できる大人に育てなさい」と言われています。まだ、歩き始めたところですが、いざれ迎える成人式の時に、卒業した子どもと酒を酌み交わしたら、きっと感動して泣いてしまうと思います。想像するだけで熱いものがこみ上げてきます。始まったばかりですが、一緒に成長していきたいと思



八月某日、千葉青年寮初の夏

休みの盛り、子どもたちは元気にのびのびと成長しています。同時に広大な芝生の庭にも雑草がすくすくと育ち、理事長から落雷。法人全体の協力をもらい、目下草取り奮闘中の執筆と相成りました。子どもたちは連日、いろいろな職員が来てくれて楽しそうですが、感謝の気持ちと責任の重さを改めて痛感した次第です。「ありがとう」と言える大人のお手本となったかな？

（ふる里学舎千葉青年寮 施設長）

お役に立てれば
「受注科」が担う地

「受注科」が担う地域の未来

川口翔馬

近年、私たちが暮らす地域社会では、高齢化の進行に伴い、生活の身近な場面での人手不足が課題となっています。そうした中、ご高齢の自宅のお庭の整備や、企業が管理する敷地の草刈りといった、除草作業に関すること相談やご依頼が年々増え続けています。

さらに、近年の夏季における酷暑や異常気象は、屋外作業の環境をより厳しいものにしていきます。熱中症のリスクが高まる炎天下での作業はご自身で行うにも身体的な負担が非常に大きく、対応が難しくなっています。こうした地域の現状を受け、除草作業のニーズは、これまで以上に高くなっています。

そうした声にお応えするため、ふる里学舎では草刈り機や専用機材を導入し、作業の効率化を図ってきました。ハンマーナイフや電動草刈り機、傾斜地でも安全な自動草刈り機の活用により、作業のスピード向上と利用者さん・職員双方の負担軽減を進めてきた経緯があります。しかし、今後増え続ける依頼に継続して応えていくためには、さらなる協力体制をつくる必要があると考えま

そこで佑啓会では令和八年度から市原事業所と蔵波事業所で連携を取り、新たに「市原受注科」を新設しました。双方のノウハウを持ち寄り多くの依頼を安定して請け負う体制を整えています。目的は「地域貢献」と「工賃向上」の二つです。地域の課題に向き合い社会を支える担い手となると同時に、仕事の幅と量を広げて利用者さんの工賃へ還元し、暮らしの基盤を確かなものにしていきます。

その中でも、現場の最前線で大きな力となり事業を支えてくれているのが作業チーム、通称「松田組」の

昨年度まで就労系事業所「きせつ館」の施設長や法人の課長職を務めてこられた松田源次さん（通称親方が率いるこのチームには、生活上の生きづらさを抱え、生きるために無銭飲食をして捕まってしまったような触法の方や、一般就労を目指す利用者さんなど、様々な背景を持つメンバーが所属しています。そうするしかなかった厳しい過去を持つ方々が、今はここで生きがいを持ち、汗を流しています。ふる里学舎がいつも美しく保たれているのは、まさに「松田組」のおかげです。



親方の口癖といえ、ば、「俺がやつたらすぐ終わる」「半日もかかんねえっべ」そして本当にその言葉どおり、あつという間に終わらせてしまふのだから驚かされます。口だけでなく、自ら現場の最前線で作業を進め、ただ背中で語る姿。だからこそ利用者さんも深く尊敬し、ついでいくのだと実感します。単なる草刈りにとどまらず、ユンボでの伐根作業、市原の芝の管理、砂利舗装、蔵波茶寮の庭園づくり、蔵波青年寮の公園整備、静風荘のインターロッキング工など挙げたらきりがありません。今こうして受注を拡大できるのも、間違ひなく親方が積み上げてこられた現場の力があつたからこそです。唯一無二の存在だと感じています。そうして受注科によつて丁寧に住

上げられる現場では、地域住民の方々から「暑い中ありがとうございます。夫が体調を崩して草刈りができなくなっていたので助かります」「道路を綺麗にしてくれて安心します」といった温かいお声が届きます。こうした感謝の言葉は、作業にあたる利用者さんと職員双方の大きな励みとなり地域に貢献している実感と人間的な成長につながっています。

地域の課題解決に向けた地域貢献、働く喜びと生活を支える工賃向上、そして社会参加。これらを結びつける形にしていく取り組みが「市原受注料」です。

偉大な親方の背中を追い、その存在に近づくには私自身まだまだ遠道のりだと感じておりますが、いつか自分もそんな存在になれるよう、日々の受注活動、学舎の環境整備、そして利用者支援に全力で励んでまいります。今後とも皆様の温かいご支援をよろしくお願い致します。

(ふる里学舎 主任)

九十九里大漁節

私の裏方体験記

大川隼也

佑啓会に入職して四年目になりましたが、これまで職員旅行やスキースノボツアーなど職員の福利厚生行事を中心に実行委員を経験させていたできました。担当者間で役割を決め当日を迎えるまでの準備はとも大変なものですが、参加者の楽しんでいる姿を見ると「この行事の実行委員やって良かった」と都度思われます。行事を経験していく中で、先輩者ながら「人に喜んでもらえる仕事」の楽しさ、魅力を学ぶことができました。

新年度がはじまり辞令交付式で配布される実行委員の担当表、今年度の私の担当は「地引綱」。兼ねてより地引綱や納涼祭の担当を希望していたので、抜擢してもらえたことに心躍る思いでした。

実行委員の動きだしは実施日より数カ月前から始まります。ふる里学舎千倉の施設長、長尾実行委員長を中心に、各々の役割、当日の催しを綿密に話し合い、少しずつ流れがイメージされていきました。私は同じ市原所属の先輩、高野さんと協力して準備を進めていくことになりましたが、この高野さんが本当に頼りになる。動きの確認から、事前準備まで手厚くフォローしていただきました。後輩をそっと支える姿を間近で見て、自分もこんな先輩になりたいと素直に思いました。高野さん一生ついていきます！

前日に現地会場の設営を行い、いよいよ迎えた当日、職員家族、千倉蔵波、船橋、千葉の入所児童を含め参加人数は二九〇名となり、食事会場は二フロアーを貸切る大所帯となりました。

子どもたちは着替えを置いて急ぎ足で海辺へ。「せーの！」と全員で声を掛け合い、力を合わせて引き上げた網の中にはあふれんばかりの魚が、まさに大漁で、「うわー！お魚いっぱい！」と大人も子どもも大喜びです。



地引綱が締めれば夏の風物詩。スイカ割りのはじまります。大勢参加している子どもたちに楽しんでもらうため、今回八レーンを準備しました。一斉にスイカ割りを行う光景は圧巻で、九十九里の浜辺は大歓声に包まれました。

さて、ここからが私の本格的な仕事。子どもたちが楽しんでいる間に

魚を捌くという大仕事が待っています。食事会場で引き上げられた大漁の魚を待ち受けます。魚を捌くチームは私を含めて六人、魚が届いてチームの皆で口をあんぐり。「これをたった六人で捌くのか……」一瞬圧倒されてしまいました。が、食事を楽しみにしている子どもたちのため頑張らなくては！調理の役割分担を決めて、早速取り掛かります。魚は鮮度が命！ふる里学舎蔵波の施設長、松橋料理長（地引網行事の名物、通称さかなおじさん）を中心に、会場で威勢の良い掛け声と共に調理担当料理担当が見事な連携を見せました手を動かしながらみんなで笑い合ったその時間は、今振り返っても最高の思い出です。

私は昔から料理をするのが好きで、幼い頃はよく母親と一緒にキッチンに立って夕飯を作っていました。家族に「美味しい！」と言ってもらえるのがただ嬉しくて、一時期は本気で調理師の道を志したこともありま

さあ、遊びを終えた子どもたちが砂だらけの足を洗い続々と食事会場へ。お腹を空かせた小さな怪獣たちは「いただきます！」の元気な声を合図に勢いよく料理を食べ始めます。会場のあちこちから「美味しい！」という声が飛び交い、これまで準備してきた仕込み、調理の苦労が一気に吹き飛び、なんだか胸が熱くなりました。頑張って良かった。

また、地引網を通じて見られた上司や先輩方の「親としての温かい表情」も強く心に残っています。仕事の中のキリツとした顔とはまた違う、温かく子どもを見つめる眼差しに接することができ、とてもほっこりとした気持ちになりました。業務の枠を超えて、新たな一面を発見できることこそが、家族参加型行事の一番の魅力だと思います。きっと子どもたちは夏休みの絵日記に地引網の思い出を書いてくれることでしょう。

今や一大行事となつた地引網は大盛況のうちに終えることができた。大きなイベントを成功させるには、参加している人たちが如何に楽しめるか考え、担当者間でチームワ

ークよく取り組むことなのだと思
感しました。この貴重な経験を今後
活かしていきたいと思います。ここ
で里見理事長にお願いがあります…
次年度は納涼祭の実行委員を希望
いたします！

(ふる里学舎 支援員)



今年度新たに開所した千葉青年寮！
現場のリアルな一日をお届けします！
後半動画も是非ご視聴下さい！



連日の猛暑に「夏が始まった」と感じていたのも束の間、朝晩の風にはんわりと秋の気配が混ざる季節となりました。季節の移り変わりは早いものですが、佐啓会の情熱と熱量は冷めることはありません。これからも変わらぬ熱意と共に、佐啓一三七号をお届けします。

(支援員 栗川克明)